

「金屋子信仰」再考

— 研究史の再検討と石見地方の金屋子神祭祀 —

山崎 亮

はじめに

一般に冶金や鍛冶・鋳物など金属の生産・加工に関わる神格としては、記紀神話に見られる天津麻羅（天目一箇神）、石凝姥、金山彦、金山姫、さらにそのような古典神以外には稻荷神や荒神、山神等が挙げられる。しかしながら中国地方のたたら製鉄をめぐることは、金屋子神がその代表的な地位を占めてきたことは周知の通りである。金屋子神は、出雲能義郡西比田（現安来市広瀬町）所在の金屋子神社を本社として、出雲、伯耆、備後、石見にわたって二二の分社を数え、またこれらの地域の鑪場にも守護神として多く勧請されていたばかりではなく、地域社会の小祠や森神にもその名が数多く見えている。

このような金屋子神に関する研究としては、一九四〇年代から五〇年代にかけての石塚尊俊による民俗学的研究が代表的なものである。それは基本的に、金屋子神をたたら製鉄の職業神ととらえ、「そもそも金屋子神とはどのような神なのか」を問うて、その源流を探ろうとする試みであった。その背景には、当時の民俗学の起源適及的発想もさることながら、大正期以降、在来のたたら製鉄がほぼ消滅し、それに伴って金屋子神への信仰ないしは祭祀も急速に衰退していくなかで、失われゆく「金屋子信仰」の本質を喫緊にとらえておかねばならない、という要請もあったのだろう。しかしながら、このように金屋子神の本体と起源を探究するアプローチには、種々の問題点を指摘することができる。たとえば、文献資料が不十分ななかで推測に推測を重ねる議論の恣意性をど

う回避するのか、また鑪場における職業神としての金屋子神の特異性が強調される半面、地域社会における金屋子神祭祀の実態がほとんど省みられていない、等々。

小論では、石塚に代表される従来の金屋子神研究を再検討するとともに、地域社会における金屋子神祭祀の一端を、石見地方における明治初年の「神社取調」による「神社書上帳」を素材として探ってみたい。現在ではすでに失われてしまったといってもよい「金屋子信仰」をめぐる、ささやかながら再考を試みるのである。

一 研究史の再検討

1 前史

さて、金屋子神の研究にとっては、伯耆日野郡の鑪経営者下原重仲（二七三八—一八二一）が天明四（一七八四）年に完成させた『鉄山秘書』の公刊が、大きな意味をもっている。この書は、東京帝国大学に保管されていた写本を、冶金学者の依国一が『日本鋳業会誌』に一九二二年から翌年にかけて公表して、初めて一般の目に触れるようになった。この公開がひとつの契機となって、さまざまな観点からの研究が進められたのであった。たとえば金屋子神研究の嚆矢と目される山田新一郎「神代史と中国鉄山」（『歴史地理』二九—三〇—三二、一九二六—一九二七年）にしても、これを部分的に継承する向井哲吉「鉄業の神、金屋子神」（『日本鋳業会誌』五三一、一九二九年）にしても、金屋子神に関する記述は、もっぱら『鉄山秘書』に依拠している。同書は、近世後期の中国地方におけるたたら製鉄のあり方を今に伝える貴重な資料として著名であるが、そこには、西比田の金屋子神社から伝わったとされる「金屋子神祭文」——安部正重なる者が、能義郡非田（比田）に降った金屋子神を発見し、みずからこれを祀る神主になったという金屋子神

社の由来譚。山田も向井も、その成立は室町時代に遡ると見ている——を始めとして、金屋子神に関わる生き生きとした伝承が豊富に含まれていたからである。同書に描き出される金屋子神独特の降臨譚や、血穢を嫌いながらも——したがって強い女性忌避を示す——、死穢を好む神秘的で特異な性格——村下の屍体を神体にしたり、死亡した村下の髑髏の色の変化で鉄の出来を占ったという伝承に端的に示されるように——などが、中央の研究者たちの注目を集めたのであろう。

やがて金屋子神の研究は、その信仰の源流を求めて、主に民俗学の視点から推し進められるようになる。すでに柳田国男は「金子屋敷」(『郷土研究』二一一、一九一五年)において「金鑄場」や「鉄糞塚」等の地名の全国的な分布に着目し、そのなかで近世美作東部の地誌である『東作誌』の記述から、鑪師の神として「金屋護神」や「金鑄護神」の名称を拾っている。また、「カナイゴと云ふ地名は中国地方には弘く分布して居る。石見那賀郡雲城村大字七条字若林谷には、金屋子と書いてカナイゴと云ふ小字もある。察するにカナイゴは本来タ、ラ師の別名であつてカナイゴの守護神なるが故に金鑄護神などの名を用ゐたものでは無からうか」(『柳田国男全集』第七卷、五四〇頁)と述べ、その上で鍛冶師、鑄物師、鑪師等、金属生産・加工に携わる漂泊民⇨金屋に共通する守護神として、東日本に多く見られる「金鑄神」ないしは「金屋神」の名称を宛てている。もとより「金屋子」の地名に触れてはいるものの、この時点で柳田はおそらく『鉄山秘書』に接しておらず、金屋子神そのものが主題とされたわけではなかった。しかしながら、漂泊する特異な金屋集團の守護神としての金屋神というイメージは、この後の民俗学的金屋子神研究の暗黙の前提となっていく。他方で注目すべきは、柳田が、このような金屋神が女性の魔除けの利益をもつという屋久島の事例を引いて、地域社会における金屋神の小祠の存在を説明しようとしている点

である。要するに金屋神は単に製鉄の神であるのみならず、より一般的な利益の担い手でもあったからこそ地域社会に定着し得た、というのである。

しかしながら『鉄山秘書』の記述をふまえ、金屋子神に定位した民俗学的研究は、中山太郎「鍛冶源流考」(『旅と伝説』一一九、一九二七年)が最初ではなからうか。向井の論考によって『鉄山秘書』の存在を知ったという中山は、諸家の文献を博搜しながら「金屋子神祭文」の内容を紹介し、たたら製鉄が中国大陸北部から朝鮮半島を経由して日本に伝播したという自説を補強すべく、金屋子神に鍛冶職の女性シャマンの面影を見出して、「金屋子信仰」の北方系シャマニズムの性格を強調するのである。

2 在地の民俗学的研究

中山のこのように壮大な議論の一方で、この時期、牛尾三千夫や石塚尊俊ら在地の研究者は、一五年戦争の軍需に呼応して細々と生産が再開された中国山地の鑪場を訪ね、かろうじて残っていた現役の村下たちに聞き取り調査を行なって貴重な記録を残している。その成果の一端は、同じ『國學院雑誌』四七一—一〇「民間信仰研究号」(一九四一年)に並んで掲載された牛尾三千夫「金屋神の信仰——伯備線以西の地方をその資料として」と石塚尊俊「金屋子神の研究——特に鑪を中心」のなか

に示されている。前者の論考の冒頭において牛尾は、漂泊する金屋集團が一定地域に定着する時期を室町期と推定し、金屋子神社への信仰はそれ以降に興隆した、ととらえる。その上で、金屋子神が金山姫と金山彦との間に生まれたとする伝承を石田春律『金屋子縁記抄』(文政八「二八二五」年成立)から引用し、さらに『鉄山秘書』も援用しつつ、「元々比田の金屋子神

なるものは、同社の神主阿部家の屋敷神の如きものであったのではなかったか。阿部晴明の裔と称して、出雲の山間部にその一族を繁栄させ得たのは、この製鉄作業のようやく盛んにならんとして、阿部家の家の神の信仰を、製鉄の守護神として世間一般に確認させた頃からであったやうである。これより以前の金鑄神信仰がどうであらうとも少くとも比田の信仰に於ては、その神主阿部家を離れてその信仰はなかつたと云つてよいのである（七八頁）と述べている。これを要するに、漂泊する金屋集団の守護神たる金屋神ないしは金鑄神が安部氏によって改変・流布された一ヴァージョンとして、金屋子神を理解しようとするものである。また、金屋子神が死穢を好み、屍体を神体としたという伝承に対しては、その基底に往古の人身御供を推測している。さらに石見邑智郡市山村出身の牛尾は、金屋子神が邑智郡に濃密に分布しながらも、那賀郡から美濃郡以西になるとほとんど見出せなくなる事実を指摘し、併せて金屋子神祭祀のあり方が、田の神「さんばい」を中心とした大田植に類似している、と主張する。たとえば大田植の早乙女には、一般に女性忌避が強いはずの鑪場に入りを許された「タ、ラヲナリ」——各地に伝わる金屋子神を描いた図像に見られる¹⁰⁾の伝承が対応している、とみなすのである。これは、たたら唄や田唄などの民俗芸能に関心を注いでいた牛尾ならではの観点であろうが、田の神と金屋子神の神格の共通性というよりも、むしろたたら製鉄と大田植がともに大がかりな共同作業によっていることの帰結と見た方がいいかもしれない。その一方で牛尾は、金屋子神の背景にあるはずの「火の神信仰の源流」（八三頁）にも思いを馳せている。

これに対して石塚の「金屋子神の研究」は、もっぱら『鉄山秘書』の記述に依拠しながら、とくに鑪の村下による伝承に着目する。彼は、西比田金屋子神社の神主安部氏の「法力」の絶対性を強調しつつも、その

「今一つ本の形」（八八頁）として、村下がいつそう金屋子神に近かった段階を想定している。金屋子神が死穢を好むという伝承については「墓地崇拜」との関連を、また金屋子神が犬を嫌うという伝承については稲荷神・狐との関連を推定し、さらに血穢に関連して金屋子神を女神とみなす伝承から、「村下は神の夫」（九〇頁）であり、「金屋子神本来の立場は鉾山の神ではなく、実に火の女神で」（同頁）あったという結論を導き出す。けれども石塚の筆致は、後の論考に比べると総じて断定的ではなく、この時点ではまだ確固とした金屋子神像に辿りついていない習作論文という印象が強い。その一方で興味深いのは、「金屋子神降臨最初の地は……「安部家由緒」に拠ると、太古甲子の年三月十一日甲子の日、山司神護王を父とし、水司龍王命を母とし、大和国春日山の麓に御生誕とあり……」（八六頁）とする記述である。ここには、『鉄山秘書』の「金屋子神祭文」——七月七日に播磨志相（宍粟）郡岩鍋に金屋子神が天降り、次いで比田に移ったとする——とは異なる伝承が安部家に残されていたことが示されている¹¹⁾。しかしながら石塚は、これ以降の論考では、この点について一切触れていない。

3 石塚尊俊の「金屋子信仰」論

第二次世界大戦での応召をはさんで、石塚はその後も精力的に鑪研究を進めていく。その対象は単に「金屋子信仰」に留まるものではなく、丹念な聞き取り調査に基づいて、技術面や社会組織の面も含め、生業としてのたたら製鉄そのものを、民俗学的観点から総合的に研究するものであり、他に類例のない多くの成果を上げている¹²⁾。

そのなかにおいて金屋子神については、柳田国男が主宰する民俗学研究所の紀要『民俗学研究』第三号（一九五二年）に掲載された「金屋子降臨譚」が、石塚の「金屋子信仰」研究の総決算であった¹³⁾。石塚はすで

に「鍛冶神の信仰」(『出雲民俗』一一、一九五〇年)のなかで、文献に現われる金谷神、金屋神社、金山社、金神社、叶神、さらには庚申(カナイ様)等の神格を「金屋子系鍛冶神」として一括し、その信仰圏を関東、東北、四国、九州にまで拡大してとらえ、その中核に中国地方の金屋子神を据えていた。これを踏まえて「金屋子降臨譚」では、「金屋子信仰自体の本源」(『鑪と剗船』、三九頁)が探求されるのである。

石塚はまず、その神話的・作為的性格の故に『金屋子縁記抄』や「金山姫宮縁起」等の金屋子縁起類を退け、『鉄山秘書』のみが「伝承資料の忠実な記録というのに最も近い」(同頁)と評価して、論述の資料としてはもっぱらこれに依拠することになる。その上で、近世以降の西比田金屋子神社への信仰の原動力として、神主安部氏の、ほとんど神秘化された「法力」が指摘される。『鉄山秘書』にも「鉄山ニテハ偏ニ安部氏ヲ金屋子ノ神ト崇敬スル事、往古ヨリノ仕クセナリ」と述べられているように、その「法力」への信仰は、神主本人あるいはその代人による春秋二回の「勤化」を通じて、周辺地域に及んでいた。石塚の聞き取りでも、遠く石見邑智郡、安芸山県郡に至るまで、その記憶が残されていたという。しかしながら石塚は、そのような安部氏の神通力への信仰の背後に、より古い信仰の形を探り当てようとするのである。

彼は、「金屋子神祭文」のなかで、降臨した金屋子神とこれを発見した安部氏とともに登場する「朝日長者」なる人物に注目する。この「朝日長者」は「祭文」では、みづから村下となって鉄を吹く金屋子神と神主安部氏のために、社殿を建て、原料となる炭と粉鉄を集めるだけの存在であるが、石塚はこれを、柳田国男の『神を助けた話』(一九二〇年)を援用しつつ、さまざまな説話の形で全国に流布する長者譚——貧賤な若者があるきっかけで富裕な長者となる——の一種と見なすのである。他方で吉田村菅谷鑪には、金屋子神は村下と「オナリ」を伴って降臨し

たという伝承が残されており、石塚はこの「オナリ」を元来は巫女であったととらえる。こうして、「吉田の伝、また秘書に載す祭文の内容から、神主安部の正重なるものをとり去ったあとの形というものは、結局、神とそれに傳く巫女と、そしてその父でありかつ宮社の建立者である朝日長者との、この三人立の形にまで還元することができる」(『鑪と剗船』、四九頁)と述べられ、さらにこの巫女が神の子ニ御子神を産んだとする伝承が元来は存在したのではないかという、いささか強引な推測がなされる。「ここにいう金屋子の、「子」という語にその残映を見出すのは不自然であろうか」(同書、五〇頁)。このような石塚の推論を要約すれば、金屋子神は、在地の長者の娘が巫女となって宿した神の子ということになる。

こうして石塚の見るところ、「金屋子信仰」は、八幡神に関する柳田国男の著名な議論に接続される。宇佐八幡を出発点とする八幡神社には、通常、応神天皇(誉田別尊)とその母神功皇后(氣長足姫尊)ならびに比咩大神の三神が祀られているが、その成立は複雑で、由来は明確ではない。柳田は、「玉依姫考」(『郷土研究』四一一、一九一七年)では、巫女が神の子を宿し、母子ともに崇拜の対象になるという母子神信仰の典型が八幡神であるとし、また「炭焼き小五郎が事」(『海南小記』、一九二五年、所収)においては、炭焼きや鍛冶師などの漂泊民が奉斎する金屋神は、実は火の神ニ日の神(太陽神)であり、その源流には、当初鍛冶の翁として出現した八幡神(誉田別尊)が位置すると見ている。このような柳田の議論に全面的に依拠しつつ、石塚は、次のような結論を導き出す。すなわち八幡神は、火の神としての当初の神格から多様な展開を遂げていったが、火を司る母子神というその原型こそは、中国地方の「金屋子信仰」のなかに残っていた、というのである。

この結論はその後一貫して維持されていく。たとえば註(2)でも触

れたように、石塚は二〇〇〇年の時点でも、「私はやはりあの金屋子神降臨譚の根源には、わが古代信仰に共通する、神と神に仕える巫女、そしてその巫女が感応して産み育てる雄々しき御子神という思考が流れていると思うものです」(石塚尊俊「金屋子神の信仰について」『しまねの古代文化』七、五五頁)と述べているのである。

4 小括

結局のところ「金屋子信仰」は、「八幡信仰」を祖型とするわが国古来の金属神信仰の正統を受け継ぐものであり、だからこそその範囲は遠く九州や東北にまで広がっていたとするのが、石塚の主張であった。彼は「金屋子神祭文」中の「朝日長者」と、菅谷鑪の口碑に見える「オナリ」という二つのキーワードを結びつけ、「金屋子信仰」の議論を、八幡神Ⅱ鍛冶神をめぐる柳田の議論に巧みに接合したのであった。しかしながら、八幡神をめぐる柳田の議論が当時有力な説であったのは事実であるとしても、その妥当性をめぐっては異論も出ている¹⁵⁾、それ以前に、石塚の立論自体がかなり恣意的であるようにも思われる。たとえば「朝日長者」の語は『鉄山秘書』以外にはどの縁起類にもまったく見当たらないし、逆に「オナリ」ないし「ウナリ」の語は『鉄山秘書』や『金屋子縁記抄』にも見えるものの、これが金屋子神とともに降臨したという伝承は、菅谷鑪の村下の口碑にしか伝わっていない。石塚の立論には、火を司る母子神への信仰という柳田の八幡神論の構図がまず前提にあって、これに都合のよい資料のみを、金屋子神に関連する伝承から抜き出したにすぎないといっても過言ではあるまい。本来、金屋子縁起類において最も中心であった神主安部氏の存在が、石塚の結論からは捨象されてしまっていることに、それは端的に象徴されている。

もちろん、「金屋子信仰」が遠く「八幡信仰」の祖型にまでつながっ

ている可能性は、完全には否定できないかもしれない。しかしながら、それを近世以降の限られた資料から索出することは、きわめて困難といわねばなるまい¹⁶⁾。そのようなある種のロマンの追求に、どれほどの意味があるのかも疑問である。この点については、以下のような牛尾三千夫の言葉が、むしろ正鵠を射ているのではないだろうか。「金屋子神は、日の神―火の神の信仰を受けつぐものではあるが、近世の鉄山業者達には、そうしたむつかしい論理は不必要であった。男神であろうが、女神であろうが、要は鉦場の小鉄がよく湧いて、十分なる成果をあげられる神でさえあればよかったのである。不調の場合呪力の神秘をもって正常に返してくれる神であればよかったので、金屋子神の系譜などはこれを問題とするところがなかった」(牛尾三千夫「信仰と歌謡」『菅谷鑪』島根県教育委員会、一九六八年、六〇頁)。

これまであまり注目されることのなかった、金屋子神をめぐるそのように具体的な位相こそが、実は探求されるべきではなかったのだろうか。もとより現在は失われてしまったといってもよい「金屋子信仰」であるだけにその探求は困難であるが、次節では石見地方の事例から、とりわけ地域社会における金屋子神祭祀の一端を垣間見ることにしたい。

二 石見地方の金屋子神祭祀

津和野藩領を除く石見地方では、明治三年から翌年にかけて、太政官布告に基づく「神社取調」が、浜田の国学者藤井宗雄を中心に行われ、その調査結果は「神社書上帳」として、現在は島根県立図書館に所蔵されている¹⁷⁾。他地域とは異なって、石見地方の「神社取調」では、「神社」のみならず、「小社」や「森神」(神木)の項目まで立てられ、各村落の多様な神格の祭祀状況がかなり詳細に明らかにされている¹⁸⁾。これは基本的に藤井宗雄の独自の方針に基づいているが、彼自身、この「神社取

- ・都賀行村：神社＝金屋子神社（祭神＝金山彦命、金山姫命。造営＝当村百姓大原久米四郎ヨリ調之）[大原]
小社＝金屋子神1 [祉谷]
森神＝金屋子神1 [山本奥]
- ・千原村：小社＝金屋子神1 [小貝]
- ・九日市村：小社＝金屋子社4 [鑪谷、三丹谷2、花谷]
- ・酒谷村：神社＝八幡宮（祭神＝譽田別命、足仲彦命、息長姫命。末社二字＝恵比須社、金屋子社）[光]
小社＝金屋子社1 [保関]
- ・長藤村：森神＝金屋子神3 [志田原2、蒲代]
- ・奥山村：小社＝金屋子社1 [条山]
森神＝金屋子神4 [丸埜2、白波、鑪迫]
- ・惣森村：森神＝金屋子神1 [久手原]
- ・久保村：森神＝金屋子神2 [藤木、恵比須假屋]
- ・粕淵村：小社＝金屋子神1 [野間氏永城]
- ・高畑村：森神＝金屋子神2 [川原畑、森原]
- ・湯谷村：森神＝金屋子神2 [川内神、坂屋森]
- ・祖式村：小社＝金屋子社1 [横谷]

○那賀郡

- ・長良村：小社＝金屋子社1 [番ノ木]
- ・下河戸村：小社＝金屋子社1 [土居山]
- ・大田村：神社＝大飯彦神社（祭神＝大背飯三熊大人。末社二字＝稻倉魂神、金山彦神）[飯山]
小社＝金屋子神1 [櫻谷]
- ・渡津村：小社＝金屋子社1 [長田]
- ・田野村：小社＝金屋子社1（金屋子神社）[舟床]
- ・南川上村：小社＝金屋子社1 [恵口鑪]
- ・跡市村：森神＝鑪大明神 [鑪]
- ・原井村：神社＝八幡宮（祭神＝応神天皇仲哀天皇神功皇后。造営＝従前領主ヨリ調之。末社八字＝両皇大神宮、熊野神社、
稻荷社2、醫祖神社、若宮八幡宮工匠祖神社、金工祖神、田神社但当地地借鎮座）[久光山]
- ・後野村：神社＝金口神社（祭神＝不詳）[金口山]
森神＝金屋子神2 [佐埜、小笹越]
- ・七条村：小社＝金屋子神1 [金屋子]
森神＝金屋子神1 [高代原]
- ・伊木村：森神＝金屋子神2 [後谷、鍛冶屋]
- ・日脚村：小社＝金屋子社1 [大濱]
- ・内村：小社＝金神社1 [古郷]
- ・横山村：神社＝大元神社（祭神＝国常立命河内神。末社一字＝金屋子神。社職＝内村八幡宮神主牛尾身濯兼勤）[森岡]
- ・田橋村：小社＝金屋子社1 [中屋]
- ・鍋石村：神社＝金刀比羅神社（祭神＝崇徳天皇須佐之男命大物主大神猿田彦大神天宇受賣命金屋子神。安永四乙未年三月九
日河野重旨弟河野卓藏勧請。大祭六年一度。造営＝当村江尾弘三郎ヨリ調之）[大平山]
- ・折居村：小社＝金屋子社1 [下居濱]
- ・東平原村：森神＝金屋子神5 [小田、大谷、鑪森3]
- ・芦谷村：小社＝金屋子神恵美須神1 [井野木河内]、金屋子神敲鳴社1 [中屋]
森神＝金屋子神3 [平、美田迫、岡畑]
- ・室谷村：神社＝大元神社（祭神＝不詳。末社一字＝金屋子社。社職＝森榮）[大森山]
- ・木束村：森神＝金屋子神1 [出口]

○美濃郡

- ・下吉田村：小社＝金山彦命1 [サイノモリ]
- ・乙子村：神社＝佐毘賣山神社（式内。祭神＝金山彦命金山姫命埴山姫命大山祇命木花開耶姫命闇龍神廣国押武金日天皇）
[日禮振峯]
- ・津茂村：神社＝山神社（祭神＝大山祇命金山彦命。元慶五辛丑年勧請）[丸山]

表二 鑪・鍛冶関連神種別・郡別数表

		安濃	瀬摩	邑智	那賀	美濃	合計
神社	金屋子			4			4
	祭神＝金山	4	2	1	(1)	2	9(1)
	撰末社＝金屋子	(1)		5(2)	2(2)		7(5)
	天目一箇			1			1
	金口				1		1
小社	金屋子	3		31(5)	10(2)		44(7)
	金山			1		1	2
	金鑪	1				1	1
	金神				1		1
森神	金屋子	4	4	50	14		72
	金山	1	2				3
	金屋			1			1
	鑪大明神				1		1

()内は、該当する神格が他の神格と複合して記されている等、イレギュラーなものを外数で示している。

表三 金屋子神社「勸進帳」による石見地方の鑪・鍛冶ならびに「神社書上帳」による金屋子神の郡別分布

	年 代	安濃	瀬摩	邑智	那賀	美濃	鹿足	合計
	鑪・鍛冶	寛政三(1791)年	2/ 3.6%	5/ 9.1%	32/58.2%	11/20.0%	5/ 9.1%	—
	文化四(1807)年	5/ 7.2%	3/ 4.3%	47/68.1%	13/18.8%	1/ 1.4%	—	69
	文政二(1819)年	2/ 8.0%	3/12.0%	12/48.0%	7/28.0%	—	1/ 4.0%	25
金屋子神	明治三～四(1870-71)年	7/ 5.4%	4/ 3.1%	91/69.2%	28/21.5%	—	—	130

表一 明治初年「神社書上帳」記載金屋子神等鑪・鍛冶関連神一覧

※()内は「神社書上帳」の記述による補足、[]内は字名を示している。地域区分、村の配列、神社・小社・森神の区別は「神社書上帳」による。判別しやすいように金屋子は赤、金山は青、それ以外の神格は緑で、また金属との関連を示すと思われる字名は黄色の塗り潰しで示した。さらに村名・字名のゴチックは、西比田金屋子神社「勸進帳」にも見える地名を示している。

○安濃郡

- ・上山村：森神＝金屋子神1 [浄光]
- ・加淵村：神社＝金社神 (祭神＝金山彦命。造営＝加淵村長原村ヨリ調之) [芳迫]
- ・吉永村：小社＝金屋子社1 [モヨウシ]
- ・池田村：森神＝金屋子神1 [鉦]
- ・圓城寺村：小社＝金屋子神1 [金屋子]
- ・小屋原村：神社＝若一王子社 (撰社彦山鉄矢大神 [祭神＝金山毘古金山毘賣命]) [龜山]
- ・多根村：神社＝佐比賣山神社 (祭神＝大巳貴命、少名彦名命、須勢理姫命、相殿金山彦命、面足命□根命) [中積]
 - 小社＝金屋子神1 [小笹]
 - 森神＝金屋子神2 [松原、鍛冶屋床]
- ・小豆原村：神社＝金子神社 (祭神＝金山彦命) [神主山]
- ・才坂村：小社＝金輪神1 [大神]
- ・鳥井村：神社＝佐比賣山神社 (祭神＝金山彦金山姫命) [市岐嶋山]
- ・鳥越村：森神＝金山彦神1 [長崎]

○邇摩郡

- ・北佐木村：神社＝大歳神金山彦命社 (祭神＝大年神、金山彦命) [金町]
- ・福原村：森神＝金屋子神1 [山吹床]
- ・荻村：森神＝金屋子神2 [江奥、殿迫奥]
- ・佐摩村：神社＝佐比賣山神社 (祭神＝金山彦命、美濃郡佐比賣山神社より勸請) [銀山町仙山]
- ・新屋村：森神＝金屋子神1 [岡臺]
- ・忍原村：森神＝金山彦神1 [鍛冶屋町]
- ・静間村：森神＝金山彦神1 [笹谷]

○邑智郡

- ・清見村：小社＝金屋子社1 [鍛冶屋]
- ・後山村：森神＝金屋子神1 [幸地神]
- ・江尾村：森神＝金屋子神1 [雲毛]
- ・今田村：小社＝金屋子神1 [長尾]
- ・川戸村：神社＝妙見社 (末社金山日吉神) [城水山]
 - 森神＝金屋子神5 [刃金場、三田地、火所、坂根、鍛冶谷]
- ・日和村：神社＝櫻井太詔刀神社 (妙見社、明治三年正月改替。祭神＝太詔刀命。末社金屋子社) [正青山]
- ・田津村：小社＝三宝幸神金刀比羅神金屋子神愛宕社水神杵築社稲荷神恵美須社 (八神神社) 1 [坂根山]
- ・渡利村：小社＝金屋子神1 [水木]
- ・中野村：小社＝大歳神金屋子社1 [天神面]
 - 森神＝金屋子神1 [寺田屋]
- ・矢上村：神社＝金屋子神社 (祭神＝天目一箇命。造営当村ヨリ調之。加茂神社境内地。社職＝当村諏訪神社大宮司諏訪鞆夫兼勤) [加茂山]、天目一箇神社 (祭神＝天目一箇命。造営＝当村鹿子原ヨリ調之。社職＝当村諏訪神社大宮司諏訪鞆夫兼勤) [原山]
 - 小社＝金屋子社5 [柚木谷、日元、八田子、温井、大岩]、金屋子神薬師二柱神水神天満宮火産靈神1 [八田子]、大年社金屋子神秋葉神地主神1 [森脇谷]
 - 森神＝金屋子神9 [奥番沢、近正、川崎、小縣 (懸)、大歳、上竹、大年、大城古、鉄穴内]
- ・市木村：神社＝麦尾八幡宮 (末社金屋子社) [麦尾山]、馬場八幡宮 (末社金屋子社) [馬場山]
 - 小社＝金屋子社1 [道正原]、金屋子神4 [奥入、松原、鱒越、橋本]
 - 森神＝金屋子神3 [熊山、金屋子、新所]、金屋神1 [鳥面]
- ・龜谷村：森神＝金屋子神1 [奥龜谷]
- ・上田所村：森神＝金屋子神1 [立岩]
- ・高見村：神社＝賀茂神社 (末社金屋子社) [月向山]
- ・上口羽村：森神＝金屋子神1 [川角]
- ・下口羽村：森神＝金屋子神1 [菖蒲]
- ・上田村：神社＝八幡宮 (末社金神社) [柿尾山]
 - 小社＝金屋子社稲荷社 [豊栄山]
- ・都賀西村：小社＝金屋子神1 [乙谷鉦]、金居子 (金屋子) 神1 [丁]
- ・谷住郷村：森神＝金屋子神1 [伊谷山]
- ・大林村：神社＝山神社 (祭神＝金山彦神、金山姫神) [森]
- ・村之郷村：小社＝金屋子神1 [下畠]
- ・川本村：神社＝金屋子神社 (祭神＝金山彦命、石凝姥命。造営＝当村三上為吉郎ヨリ調之) [石川]、金屋子神社 (祭神＝天糠戸神、石凝姥命。造営＝当村山根八朗ヨリ調之) [谷]
 - 小社＝金屋子社1 [先見谷]
- ・川下村：小社＝金屋子神1 [繪堂]
 - 森神＝金屋子神2 [瀬尻、材木]
- ・田窪村：小社＝金屋子神1 [小柄]
- ・大貫村：森神＝金屋子神2 [久井谷奥、名ヶ谷]
- ・三原村：森神＝金屋子神1 [河上]
- ・南佐木村：小社＝金屋子神1 [上鍛冶屋]
- ・三俣村：森神＝高智神 (祭神＝金屋子神) [森上]
- ・小谷村：小社＝金山彦命1 [宮上]
- ・都賀本郷村：小社＝金屋子神1 [鉦]
 - 森神＝金屋子神1 [宮前]
- ・都賀郷上野村：森神＝金屋子神3 [御堂原、大谷、鉦]

調」の調査結果に基づき、さらに棟札や社伝等の情報も加味しながら、後年、『石見国神社記』を著わしている。¹⁹⁾

本節では、これら「神社書上帳」ならびに『石見国神社記』に拠りながら、明治初年の石見地方における金屋子神祭祀の一端に迫りたい。

1 石見地方「神社書上帳」に見る金屋子神の分布

前頁の表一は、「神社書上帳」に見られる金屋子神等、鑪や鍛冶に直接関連すると思われる神格を、村ごとに書き出したものである。「書上帳」自体の区分に従って、神社、小社、森神の別も示しておいた。まず気づかれることは、神社の数に比して小社、さらには森神の数が圧倒的に多いという点である。これは表二を見れば一目瞭然であるが、さらに邑智郡に集中する神社四社についても、その祭神は天目一箇神、金山彦、金山姫、天糠戸、石凝姥となっていて、金屋子神を祭神とするものはない。²¹⁾ 神社の祭神として祀られた金屋子神としては、唯一、那賀郡鍋石村の金刀比羅神社の祭神に、他の五柱と並んでその名が見出せるが、これは明らかに、金刀比羅神社本来の祭神に付随的に加えられたものである。また、金屋子神社以外にも、たとえば佐比賣山神社のように、金山彦・金山姫を祭神とするものが見られることも興味深い。

これに対して、神社の撰末社等も含めた小社や森神では、金屋子社ないしは金屋子神として祀られるものが大半で、金山彦等、それ以外の神格はほとんど見出せない。そもそも「書上帳」に見られる小社・森神の名称には、たとえば稻荷神、八幡神はもとより、厳島神、金刀比羅神、さらには杵築神、三穗神等、著明神社の名称がそのまま神格の名称として用いられる事例が、ごく一般的に見受けられる。²²⁾ とするならば、小社・森神として金屋子神が祀られる場合にも、金屋子神という独自の神格を祀るといよりは、西比田金屋子神社の名称がそのまま神格の名称

として借用される場合が多かったであろうことは十分想像される。第一節でも触れたような、西比田金屋子神社からの「勧化」がそこに大きく作用していたと見るべきであろう。

そこで、西比田金屋子神社に残された「勧進帳」によって明らかとなる鑪師・鍛冶師の分布と金屋子神祭祀との関連を見てみよう。「勧進帳」は、寛政三（一七九二）年、文化四（一八〇七）年、文政二（一八一九）年に、西比田金屋子神社再建のための奉加金を納めた鑪師・鍛冶師の所在と名前を記した帳簿である。²³⁾ もとより、おそらくは神社側からの「勧化」に呼応した自発的な奉加の記録といえるであろうから、当時の西比田金屋子神社の信仰圏を完全な形で示すものとはいえないが、少なくともその大略を示していると見てよいだろう。表三にその分布数をまとめてみた。石見地方で奉加した鑪師・鍛冶師の所在地は、寛政三年では五ヶ所、文化四年には六ヶ所、文政二年には二五ヶ所を数えるが、そのうち邑智郡では、それぞれ三ヶ所、四ヶ所、一ヶ所、割合でいうと五八・二%、六八・一%、四八・〇%に上る。また那賀郡では、一ヶ所、一三ヶ所、七ヶ所で、それぞれ二〇・〇%、一八・八%、二八・〇%である。西比田金屋子神社と結びついた鑪師・鍛冶師が、邑智・那賀両郡、とりわけ前者に集中していたことが知られる。

一方、明治初年の「神社書上帳」における小社・森神の金屋子神の数も表三の下欄に示しているが、神社境内の撰末社も含めて旧浜田藩・銀山領における合計一三〇柱のうち、邑智郡は九一柱で六九・二%、那賀郡では二八柱で二一・五%である。「勧進帳」と「神社書上帳」との双方で、所在地の地名が重なっているものは、表一でゴチックで示したように、さほど多いとはいえないが、²⁴⁾ しかし郡別の割合で見ると、「勧進帳」における鑪師・鍛冶師の分布と「書上帳」に見る小社・森神としての金屋子神の分布は、驚くほど近似したパターンを示している。

いかえれば石見地方においては、小社・森神としての金屋子神の分布と、西比田金屋子神社の信仰圏——あるいは神社からの「勸化」がなされた地域——とは、ほぼ重なり合っていた、と見てよいだろう。邑智郡に濃密に分布する金屋子神が美濃郡以西になるとほとんど見出せなくなるという、第一節で見た牛尾三千夫の指摘は、少なくとも明治初年の時点では裏付けられた、ともいえよう。

2 『石見国神社記』に見る金屋子神

次に、藤井宗雄『石見国神社記』から、興味深い事例をいくつか取り出してみよう。まずは金屋子神以外の神格であるが、たとえば安濃郡小屋原村の若一王子社の撰社彦山鉄矢大神については、享保一三年再建の棟札に、天竺から漂流してきたとする「金山彦鉄矢権現」の由来譚がきわめて素朴な形で描き出されている。²⁶ その中世神話的な記述には、各地に流布する種々の金屋子縁起類に通ずるものがある。また、同じく安濃郡小豆原村の金子神社の祭神は金山彦命であるが、別名として「銚子大明神」あるいは「鉄子大明神」とも呼ばれていた。²⁷ この別名から見れば、これも製鉄関連の神格といえるだろう。さらに邑智郡大貫村には、「邑智郡神社書上帳」に記載がないものの、次のような金山神が祀られている。「金山神／興盛寺鎮坐／宗雄云寺号を興盛寺と云を想ふに銅鉄の為に祀られ寺は此神の為に置れしならむ／祭神金山神瑜伽大権現本地日光大菩薩秋葉大権現本地月光菩薩○神体中鏡鑪鉄木像二左鏡鑪鉄鑿口形鏡右鏡鑿口形鏡／祭日三月三日／建物本社拜所／末社金毘羅大権現本地不動尊／同愛宕大権現本地地藏尊／社人真言宗興盛寺宝忍」。金屋子縁起類には神仏習合の性格が顕著に見られるものが多いが、これもその典型的な一例であろう。

次は、川本村の金屋子神社の例である。「金屋子神社／石川鎮坐／祭

神金山彦命石凝姥命○神体木像鏡／祭日十月十五日／建物本社拜所鳥居／棟札奉建立金山彦尊社一字享保五庚子年十二月八日神主大宮司牛尾飛騨守願主丑年家内長久祈攸施主三上七郎右衛門同弥七郎裏に金山彦尊社再建立元文二丁巳十一月吉日名略○奉葺替金屋子大明神御舎一字安永八庚子仲夏首三辰……／宝器額一面銘に客年丙申仲冬從二十四日至二十七日夜之間土居原鑪産精鉄二百二十束則此業之大盛而偏縁神徳之主護也於是紀事實一書一役夫之姓名一献額以表一崇敬之微意云天保八丁酉歲三月吉日鑪主三上氏宰事伊東豊助定忠同頼助定義同正作定直役夫武良計惣吉炭作加吉助炭多喜兼二郎同只平」。

現在は弓ヶ峯八幡神社に合祀されているこの金屋子神社は、土居原鑪を経営していた三上家によって代々奉斎されていたと考えられるが、棟札の記載で見ると享保五（一七二〇）年の建立時には「金山彦尊社」であったものが、安永八（一七七九）年の葺替以降、「金屋子大明神」と称するようになったことが知られる。先に見た金山彦を銚子大明神、鉄子大明神と呼んだ例も考え合わせると、この時期、金屋子神に関わっても、社名や祭神は固定されたものではなく、かなり流動的だったことが窺える。²⁸ また、引用の後段では、土居原鑪での操業の成功を記念して奉納された額が「宝器」として特筆されている点も興味深い。鑪操業の成功が「神徳之主護」によるものと意識されていたのもさることながら、天保期、たたら製鉄が地域の地場産業として高い評価を受けていたことの証左でもあろう。

他方で、邑智郡日和村では、二四ヶ所を数える森神の最後に挙げられた六柱について、次のような記述が見られる。「……○横ふなの大元神○阿山の大神○滝根の大神○日の城の大神○室原の大神○小やふ河内神の大神○宗雄云横ふな以下六所みな鑪所とあり然は鑪のあるに就て大元神を祀れるなるへし……」。ここでは、大元神もまた、鑪の

守護神として祀られるものであるとする藤井宗雄の認識を窺うことができる。²⁹要するに、金屋子神、さらには金山彦等、金属生産・加工に関わると通常みなされている神格以外にも、状況に応じて製鉄・鍛冶の神と目されていた神格が存在していたということであろう。

以上に見てきたところからも、金属生産・加工に関わる神格のあり方はかなり流動的であり、そもそも、たたら製鉄や鍛冶に関わる信仰が、石見地方にあっても金屋子神に限定されるものではなかったことが知られる。逆に、金屋子神が鑪・鍛冶の守護という機能に限定されるものであったか否かも、必ずしも判明ではない。前掲の表一では鑪や鍛冶等に直接関連する地名を黄色の塗り潰しで示したが、それ以外の大半の地名は、鑪・鍛冶、さらには鉄穴等に直接結びつくものではなかった。³⁰そのなかには、第一節で取り上げた柳田国男の「金子屋敷」が示唆していたように、製鉄や鍛冶の生業と関連しない他の利益を担うものや、鑪場や鉄穴場が移動した後に地域集団の守護神として祀られていたものが含まれる可能性も否定できない。また、石見西部でもたたら製鉄は盛行していたが、³¹金屋子神はほとんど祀られていなかった。先に見たように、金屋子神の分布が西比田金屋子神社の「勅化」の範囲と重なるとするならば、それは、実体的な「金屋子信仰」というよりは、製鉄業——その成否が人為だけではどうにもならず、常に危険とも隣り合わせの——に關わって要請される職業神を、西比田金屋子神社からの働きかけに応じて、その社名に託してたまたま信仰の対象としていた、というべきではないだろうか。

おわりに

もとより、金屋子神をめぐるこのように流動的な状況は、石見地方において確認されただけであるが、おそらくそれ以外の地域でも大同小異

だったのではないだろうか。そもそも西比田金屋子神社を始点とする「金屋子信仰」は、近世後半以降、貨幣経済の浸透とともに在地産業化したたたら製鉄が、永代鑪の施設を大型化させるなかで急速に拡がっていったと考えられる。この点に関連して、「鉦が永代鉦になって、その規模が大がかりになったために、失敗すればその損失もまた大きくなった」が故に、これを回避すべくいっそう厳しい信仰が求められるようになったとする、牛尾三千夫の指摘は示唆的である（『菅谷鑪』、六一頁）。そこから、死穢を好み女人を拒む特異で怖ろしい神格と、神主安部氏の絶対的ともいうべき「法力」への信仰が生じたとも見ることも可能かもしれない。

その一方で、たとえば、柳田国男が『俚諺集』から引いた備後双三郡——石見邑智郡に隣接する——の「ばんこ節」には次のような唱句がある。「たゝら打ちたや、此ふろやぶへ／塩と御幣で、浄めておいて／はいこめたや、かないごじんを」（柳田国男「炭焼き小五郎が事」『柳田国男全集』三、三五八頁）。『俚諺集』には「是は昔たゝらに歌ひしもの」という添え書きがあるだけで、それが歌われた文脈は不明であるが、むしろ「金鑄護神」＝金屋子神に対する親近感さえ窺われる。「ふる」とは森のことを指すが故に、これはまさに森神として金屋子神を祀る心意を表わしているように思われ、さらには永代鑪以前の野鑪のかすかな記憶を読み取ることも、あながち不当ではあるまい。

このようにおそらくはさまざまな位相を示していたはずの「金屋子信仰」は、しかしながら、民俗学の起源遡及的アプローチと、いわば柳田国男の「法力」によって一元化され、「八幡信仰」に淵源する古来の金属神信仰の正統へと祭り上げられてしまった。「洋鉄」の流入によるたたら製鉄の消滅が、ある種の近代化の所産であったとすれば、民俗学による「金屋子信仰」の探求も、日本における金属神の源流をノスタル

ジックに称揚しようとする、これまたある種の近代的な眼差しの所産だったといえるだろう。

註

(1) 種々の文献で繰り返し提示される数字であるが、管見の及ぶかぎり、山田新一郎「神代史と中国鉄山(一)」(『歴史地理』二九―三、一九二六年、四四頁)がその初出である。

(2) 管見の及ぶかぎり、「金屋子信仰」の語の初出は、石塚尊俊「金屋子降臨譚」(『民俗学研究』三、一九五二年)である。この語の使用は、たとえば「民間信仰」概念などと同様、信仰の対象ないしは信仰の内実の実体視につながる危険性をはらんでいる。しかしながら、金屋子神に関わる信念と実践とを包括する適切な用語が、今のところ他には見当たらないので、便宜的に「」付きで用いることにする。

(3) もとより近年も、「金屋子信仰」をめぐる、個別事例の検討と基礎データの蓄積が試みられていることは事実である。たとえば鉄の文化圏推進協議会が一九九四年から二〇〇三年にかけて行なった「金屋子神信仰分布調査」は、その典型例であろう。この調査の成果は、鉄の文化圏推進協議会編『金屋子神信仰の基礎的研究』(岩田書院、二〇〇四年)にまとめられているが、奥出雲を中心とした金屋子社祠の実態調査、ならびに西比田金屋子神社所蔵「勸進帳」の翻刻とこれに基づく分布表・分布図等の内容は、地域社会における「金屋子信仰」の実相を窺う上でも貴重な資料となる労作である。しかしながら、研究の深化という点では、そのような基礎データを十分に活用しきれていないという印象は拭えない。この点は、石塚尊俊が旧来の自説をくり返す論考を本書に寄せていることにも象徴されている(石塚尊俊「金屋子神の信仰とたたら」――その初出は石塚尊俊「金屋子神の信仰について」『しまねの古代文化』七、二〇〇〇年)であり、これはその前年十一月の鉄の道文化圏・鉄の歴史村文化

講演会での講演記録である)。それはまた、失われゆく「金屋子信仰」をどのような視点から研究するのか、方法論の問題の難しさをも示している。

(4) これらの研究史の整理としては、浅沼政誌「金屋子神信仰研究の足跡」(前掲『金屋子神信仰の基礎的研究』所収)がある。また西比田金屋子神社宮司安部正哉による『金屋子縁起と炎の伝承 玉鋼の杜』(金屋子神社、一九八五年)も参照のこと。

(5) 『鉄山秘書』に関してはその後、依国一『古来の砂鉄製錬法――たたら吹製鉄法』(丸善、一九三三年)に附録として納められ、さらには三枝博音による翻刻(『鉄山必用記事』[日本科学古典全書第十卷、朝日新聞社、一九四四年)、飯田賢一・田淵実夫による翻刻(『鉄山必用記事』[日本庶民生活史料集成]第十卷[三一書房、一九七〇年])もある。また近年には現代語訳も刊行されている(館充訳『現代語訳 鉄山必用記事』[丸善、二〇〇一年])。

(6) 引用文中の雲城村七条の小字「金屋子」は、第二節で扱う「神社書上帳」にも、金屋子神の所在地の一つとして登場する。三〇頁の表一を参照のこと。

(7) 漂泊民としての金屋への着目は、この時期の柳田が、「巫女考」や「毛坊主考」などの論考に代表されるように、宗教的性格を帯びた漂泊民に関心を寄せていた、その一つの現われであろう。

(8) たとえば牛尾三千夫「踏鞴唄ききがき抄」(『民謡研究』一一一、一九三七年)や同「たたら唄に就いて」(『たたら研究』八、一九六二年)、石塚尊俊「鑪に於ける禁忌と呪術」(『民間伝承』一一一〇/一一、一九四七年)、同「鍛冶聞書抄」(『出雲民俗』三、一九四九年)、同「村下の技術」(『出雲民俗』一七、一九五二年)、同「菅谷鑪村下聞書」(『山陰民俗』二四、一九六五年)などがある。

また、これ以外の在地の研究者による報告としては、小滝遙「和鉄製造に関する語彙」(『民間伝承』四一六、一九三九年)、同「鑪歌の二三」(『島根民俗』一一五、一九三九年)、木村晩翠「踏鞴唄と音頭」(『島根民俗』一一五、一九

三九年)、沖本常吉「民俗雜資料」(『島根民俗通信』二、一九四八年)、同「鑪文書(承前)」(『島根民俗通信』三、一九四八年)などがある。

(9) 牛尾のこの引用は、石田春律の子孫である石田春昭の「金屋子縁起抄」(『島根民俗』一六、一九三七年)による紹介が、おそらく契機となっている。周知のように、石田春律(一七五七—一八二六)は那賀郡東部、大田村の庄屋で鑪経営者であり、『石見八重葎』(文化一四「一八一七」年)や『百姓稼穡元』(文政二「一八一九」年)の著者でもある。後者は、横川四郎編(小野武夫解題)『近世社会経済学説大系 石田春律集』(誠文堂新光社、一九三六年)として、この当時公刊されたばかりであった。

(10) 金屋子神の図像は、山内登貴夫編『絵姿に表された製鉄・鍛冶の神像』(金屋子神話民俗館、一九九四年)に、多数収録されている。

(11) たとえば「甲子の年三月十一日甲子の日」という表現は、「三国姫宮因縁」や、近年の田部家古文書調査において新たに発見された「金屋子神略記」等、別系統の金屋子縁起類にも見られる年月日である。また「山司神衛王を父とし、水司龍王命を母とし」という記述は、『金屋子縁記抄』において金屋子神の母である金山姫が「我父ハ山神王我母ハ海龍王」と述べているのに対応しているし、「大和国春日山の麓に御生誕」の部分は、やはり『金屋子縁記抄』で金屋子神が「大和国三笠郡天香久山ノ麓ニテ…御出生」したという記述に対応している。

(12) たとえば石塚を中心として牛尾や白石昭臣ら在地の民俗研究者が参加した、昭和四十二年度民俗資料緊急調査報告書『菅谷鑪』(島根県教育委員会、一九六八年)はその典型であるし、また長年にわたる石塚自身の研究成果は、『鑪と鍛冶』(岩崎美術社、一九七二年)や『鑪と刳船』(慶友社、一九九六年)にまとめられている。

(13) この論考は、若干の文言の修正を加え、『鑪と鍛冶』と『鑪と刳船』のいずれにも再録されている。小論での引用は『鑪と刳船』に拠る。

(14) もとより石塚によるこの評価は、『鉄山秘書』あるいはそこに含まれる「金屋子神祭文」の成立年代の古さによるものではない。彼は、「祭文」を室町期の成立とみなす山田や向井の説を退け、これに「土農工商」の文言が含まれていることなどから、近世後期の成立と推定している。実際、「金屋子神祭文」を含む金屋子縁起類のすべてが、押立柱に支えられた高殿による永代鑪——近年の研究では一七世紀に成立し、一八世紀以降大型化したとされる——を前提としていることからみても、石塚のこの判断は首肯されるところである。ただし後で見ると、確かな伝承が実際に含まれているという根拠も明示しないまま、『鉄山秘書』の記述のみを信頼する石塚の姿勢には、大いに問題がある。

(15) たとえば、西郷信綱「八幡神の発生」(同『神話と国家』「平凡社、一九七七年」所収)では、柳田の説く八幡神の母子神的性格は認めるものの、鍛冶神としての位置づけには否定的である。

(16) そもそも金屋子神が本来八幡神と同根であり、とりわけ火の神Ⅱ鍛冶神としてのその原型を今に留めているという説明は、元来の火の神の性格が実体として現在に至るまで金屋子神のなかに受け継がれている、ということを含意している。つまり、金屋子神という独自の神格が実体として存在していると暗黙のうちにも想定するからこそ、この議論は成り立つのである。もとより、神の実体を想定するのは一つの立場——ある種の神学的立場——としてあり得るだろうが、しかし神々の素性のとらえ方はそれだけに尽きるものではない。

(17) 「安濃郡神社書上帳」(島根県立図書館所蔵「寺社史料」三八五)、「邇摩郡神社書上帳上下」(同三八二)、「邑智郡神社書上帳」(同二四八)、「那賀郡神社書上帳」(同二四九)、「那賀郡神社書上帳二」(同三八三)、「美濃郡神社書上帳上」(同三八四)。

(18) 調査は、神職や庄屋からの書上に基づき、藤井等調査員による踏査結果も加味している。当該調査地でその当時祀られていた小社、森神のすべてを網羅するものとは必ずしもいえないが、旧浜田藩領と旧銀山領全域にわたる神祇祭祀

の概略を窺うには貴重な記録といえる。

- (19) 藤井宗雄らによる「神社取調」について、また、これによって明らかとなる森神祭祀の一端については、山崎亮「明治初期旧石見銀山領における森神信仰——数量的把握の試み」(相良英輔先生退職記念論集『たたら製鉄・石見銀山と地域社会——近世・近代の中国地方』「清文堂、二〇〇八年」所収)、同「石見地方における「森神」をめぐる——明治初年「神社書上帳」を手がかりに」(『山陰民俗研究』一五、二〇一〇年)を参照のこと。また藤井宗雄『石見国神社記』は明治六(一八七三)年に成立し、明治一六(一八八三)年から翌年にかけて清書が完成しているが、私は、全八巻のうち巻一「安濃郡」と巻二「邇摩郡」とを翻刻して、島根大学法文学部山陰研究センター『山陰研究』二、三(二〇〇九、二〇一〇年)に掲載している。

(20) この「神社取調」における神社の区分は、いうまでもなく、現在宗教法人として登記されている神社にそのままなるものではない。

(21) そもそも、西比田金屋子神社の祭神が、金山彦と金山媛である(前掲『金屋子縁起と炎の伝承』、一二三頁)。

(22) この点に関しては、前掲拙稿「石見地方における「森神」をめぐる」の、とくに四二〜四三頁の表を参照されたい。

(23) 「勸進帳」ならびに、その記載に基づく鑪師・鍛冶師の分布に関しては、前掲『金屋子神信仰の基礎的研究』の第三部「金屋子神社所蔵勸進帳」に拠っている。

なお、「勸進帳」に見える鑪師・鍛冶師のなかで、津和野藩領に属するものは、邑智郡の日貫・長谷、那賀郡の長見・下来原・今福・今市・都川・小国、美濃郡の坂井川の九村、延べ一四ヶ所にすぎない。奉加金を納めた鑪師・鍛冶師たちの大半は、銀山領と浜田藩領に分布していたのである。

(24) この点に関連して、鑪場に祀られている金屋子神のなかには、「神社書上帳」に記載されている場合と、そうでない場合がある。たとえば、表一に見える邑智

郡那賀西村の乙谷鉦や同じく邑智郡の南川上村の恵口鑪は明らかに前者である。あるいはまた、那賀郡大田村の桜谷鑪では、石田春律が文化一三(一八一六)年に再建した「金鑄児社」が現存していることが確認されている(角田徳幸「江津市桜谷鉦金鑄児神社と江の川下流域の鉄生産」『たたら研究』四八、二〇〇八年)。角田は同所に「船魂社」、「山祇社」、「愛宕社」が祀られていたことも報告しているが、これは、「那賀郡神社書上帳」において同じ大田村桜谷に所在する小社として名前の挙がっている、金屋子神、船玉神、山神、愛宕神のことであろう。

逆に、「神社書上帳」では直接確認できない鑪場の金屋子神も多い。たとえば那賀郡波積本郷の二川鑪には、二〇〇一年に私が確認したところでは、経営者であった石田利七が寛政六(一七九四)年に建立したと伝えられる「金火護社」があったが、この小社は、「那賀郡神社書上帳」にも、また波積本郷の神職による手控え「文政十丁亥年波積三ヶ村上津井都治村地主祭諸事明細帳」にも見当たらない(この点については前掲拙稿「石見地方における「森神」をめぐる」四七〜五〇頁を参照のこと)。

「神社書上帳」は基本的には各村の神職によって書き出された情報に依拠するものであったから、鑪場によっては、神職の関与なしに——あるいは屋敷神として——祀られる金屋子神もあった、と考えられるのである。

(25) 前掲拙稿「翻刻 藤井宗雄著『石見国神社記』巻一安濃郡」、七八頁。

(26) 同、八七頁以下。

(27) 『続邑智郡誌』(続邑智郡誌刊行会、一九七六年)、四七九頁。

(28) 同様の例としては、同じく邑智郡の川戸村妙見社(城水山鎮坐)末社の「金山彦神旧号金屋子大明神棟札再建御神体明和五戊子年五月五日」という記載を挙げるができる。

(29) たたら製鉄と大元神との関連性については、たとえば唐溪由美子「大和村の製鉄遺跡」(『島根考古学会誌』一一、一九九五年、一一七頁)がすでに触れて

いる。

(30) 先にも引いた『続邑智郡誌』には、現在判明しているかぎりの邑智郡内の鉄穴と鑪の分布が記されているが(五〇一〜五二二頁、五二九〜五三二頁)、それらの地名にも、「神社書上帳」に見られる金屋子神の位置と重なるものはほとんどない。

(31) たとえば、沖本常吉「職業集団と交易」(和歌森太郎編『西石見の民俗』「吉川弘文館、一九六一年」所収)や、児島俊平『近世・石見の廻船と鉦製鉄』(石見郷土研究懇話会、二〇一〇年)などを参照のこと。